

2017 年度秋季大会（鹿児島大学）の記録

鹿児島大学（現・長野県立大学） 永田邦和

日本金融学会 2017 年度秋季大会は、2017 年 9 月 30 日と 10 月 1 日に、鹿児島大学法文学部（郡元キャンパス）で開催された。大会の準備委員長は永田邦和（鹿児島大学）、プログラム委員長は兵藤隆氏（山口大学）が担当した。学会史上最南端での開催にもかかわらず、自由論題には 50 件の応募があった。当日は、300 名近い学会員とゲストが参加し、各セッションで活発な議論が交わされた。

第 1 日目（9 月 30 日）には、11 の自由論題セッション、中央銀行パネル、日韓特別セッション、特別講演が行われた。中央銀行パネルのテーマは、「マーケットから見たこれまでの金融緩和政策」であった。早川英男氏（富士通総研）を座長とし、東善明氏（日本銀行）、清水智也氏（ドイツ証券）、高島修氏（シティグループ証券）の 3 名のパネリストにより、市場参加者の視点から 2013 年 4 月以降の量的・質的金融緩和政策を議論した。非伝統的金融緩和政策については、資産価格への影響を通じて実体経済に波及するルートが重要だと考えられていることから、当時の金融政策を評価するには、政策変更に対する市場参加者の反応に着目する必要がある。最初に、重要な政策変更に対する市場参加者の反応について報告され、続いて、金融緩和政策の規模の拡大や長期化に伴う副作用、出口戦略について議論した。

特別講演では、南日本銀行の森俊英頭取が、「“なんぎん新ビジネスモデル”WIN-WIN ネット業務（新販路開拓コンサルティング）～支えて、支えられて～」と題した講演を行った。WIN-WIN ネット業務は、販売見込み先を紹介するだけでなく、商談への同行や交渉支援等により新販路開拓を支援する取り組みである。森頭取は、WIN-WIN ネット業務の導入背景や概要等を中心に、地域金融機関の取り組みについて、ユーモアを交えながら熱く語られた。

第 2 日目（10 月 1 日）には、6 の自由論題セッションと金融史パネル、共通論題を開催した。金融史パネルでは、「金融業のネットワークの検討 ― 日本の近世から近代を題材に―」というテーマで、佐藤政則氏（麗澤大学）を座長とし、高槻泰郎氏（神戸大学）、轟見誠良氏（法政大学）、鎮目雅人氏（早稲田大学）の 3 名のパネリストにより、社会内部における流動性の提供と信用の供与における銀行の役割について、歴史的な観点から議論した。日本の近世から近代における金融機関と顧客との関係や、金融機関同士の関係を視野に入れ、銀行のネットワークがどのように機能してきたかについて議論するという試みに対し、討論者の筒井義郎氏（甲南大学）やフロアからも強い関心が示され、活発な議論が展開された。

共通論題では、須齋正幸氏（長崎大学）を座長に、「東京金融市場のアジアにおける競争性について」に関して議論が展開された。帰りの飛行機の出発時刻まで時間がないにもかかわらず、多くの会員が参加した。最初に、国際金融市場で豊富な実務経験を有するアレクシ

ス・ステンフォーズ氏（ポーツマス大学）と高橋秀行氏（ステート・ストリート信託銀行会長）より、東京金融市場の競争性を高めるための様々な課題が紹介された。これらの課題について、小森卓郎氏（金融庁）、奥田英信氏（一橋大学）、高屋定美氏（関西大学）が、行政や研究者の観点から意見を述べ、東京金融市場の競争性について議論をした。人材育成の議論においては、報告者ではなく、討論者の奥田氏と高屋氏が、大学教員という立場から回答するという通常とは逆の形になった。そのため、形式張らずに発言できる雰囲気になり、質疑応答の時間には、多くの質問が出された。

当日は、プロジェクターの調子が悪くなったこと以外は大きなトラブルもなく、大会を無事に終えることができた。2日間とも晴天に恵まれ、大会終了後、多くの参加者から「いい大会でした」との声が寄せられ、今でも、御礼を言われることもある。全国大会の開催が決まってから、開催経験のある学会員からアドバイスや協力の申し出をいただいた。また、多くの会員が、忙しいにもかかわらず、我々の依頼を快く引き受けてくれた。改めて、プログラム委員や準備委員、座長、報告者、討論者等の関係者各位に、厚く御礼を申し上げたい。